慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田中惣五郎著 吉野作造：日本的デモクラシーの使徒
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.11 (1958. 11) ,p.1003(67)- 1007(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19581101-0067
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581101-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

$$\frac{d^2y}{dm}=\frac{(2m\sigma_L^2-2\sigma_{QL})(B+m^2\sigma_L^2-2m\sigma_{QL})-(B+m^2\sigma_L^2-2m\sigma_{QL})^2}{(A+m^2\sigma_L^2-2m\sigma_{QL})(2m\sigma_L^2-2\sigma_{QL})}=0 \qquad (15)$$

より

$$m=\frac{\sigma_{QL}}{\sigma_L^2} \qquad (16)$$

を得る。これは $Q=\alpha L+v_1$ としたときの α にほかならない。そして二変数、$(Q-mL)$ と mL、即ち $(Q-\alpha L)$ と αL の相関は0となる。これは $(Q-\alpha L)=v_1$ であり、独立変数と誤差間の相関は0である。三変数の場合は、そのまま代入してもよいわけであるが、公式として、三変数 y、x_1、x_2（x_1、x_2 を独立変数とする）で重相関係数は

$$R^2=\frac{r^2_{yx_1}+r^2_{yx_2}-2r_{yx_1}r_{yx_2}r_{x_1x_2}}{1-r_{x_1x_2}^2} \qquad (17)$$

で示される。

この式に代入して考えれば

$$R^{2\prime}=\frac{r^2_{(Q-\alpha L)\cdot R}}{1-r^2_{(\alpha L)\cdot R}}=\frac{r^2_{(Q-\alpha L)\cdot R}}{1-r^2_{LR}} \qquad (18)$$

となる。分子を変形すれば、

$$R^2_{(Q-\alpha L)\cdot R}=\frac{\{\sigma_{(Q-\alpha L)\cdot R}\}^2}{\sigma_{(Q-\alpha L)}^2\sigma_R^2}=\frac{(\sigma_{QR}-\alpha\sigma_{LR})^2}{\sigma^2_{(Q-\alpha L)}\sigma_R^2}$$

$$=\frac{\left(\sigma_{QR}-\frac{\sigma_{QL}\sigma_{LR}}{\sigma_L^2}\right)^2}{(\sigma_Q^2+\alpha^2\sigma_L^2-\alpha 2\sigma_{QL})\sigma_R^2}=\frac{\left(\sigma_{QR}-\frac{\sigma_{QL}\sigma_{LR}}{\sigma_L^2}\right)^2}{\left(\sigma_Q^2-\frac{(\sigma_{QL})^2}{\sigma_L^2}\right)\sigma_R^2} \qquad (19)$$

分母は、

$$1-\frac{(\sigma_{LR})^2}{\sigma_L^2\sigma_R^2}=\frac{\sigma_L^2\sigma_R^2-(\sigma_{LR})^2}{\sigma_L^2\sigma_R^2}=\sigma_R^2-\frac{(\sigma_{LR})^2}{\sigma_L^2} \qquad (20)$$

で結局

$$R^2=\frac{\left(\sigma_{QR}-\frac{\sigma_{QL}\sigma_{LR}}{\sigma_L^2}\right)^2}{\left(\sigma_Q^2-\frac{(\sigma_{QL})^2}{\sigma_L^2}\right)\sigma_R^2}\cdot\frac{\sigma_R^2}{\sigma_R^2-\frac{(\sigma_{LR})^2}{\sigma_L}}$$

となる。

これは先に $Q=\alpha L+v_1$ $R=\gamma L+v_3$ としたときの、v_1 と v_3 の相関係数の自乗に外ならない。即ち

$$R^{2\prime}=r^2_{v_1v_3}$$

である。

書評及び紹介

田中惣五郎著

『吉野作造—日本的デモクラシーの使徒—』

帝国主義日本が崩壊してから十三年、われわれはいま、早くも民主主義の危機を身をもって体験しつつある。民主主義を護ろうとする勢力と、口に民主主義をとなえながら、これを打倒しようとする権力との間に、日ごとにはげしい闘いが演じられている。これは誇張でもなんでもない。われわれがおかれている深刻な現実なのである。法の尊厳を説きながら、憲法をふみにじり軍備を増強する政府は、世論をつくり出すといわれるマス・コミュニケーションの必要な援護のもとに、労働組合運動を弾圧し、とりわけ、教育の中立性の名のもとに、民主主義教育を破壊すべく勤務評定を強行しつつある。一年前に比べ、わずか一月前に比べて反動化の速度はどれほど急速であることか。われわれの祖国は一体どこへゆくのであろうか。再びあのファシズムと戦争への途を歩むのではなかろうか。こうした焦慮と危惧とそして憤りが、むらむらとわきおこるのはひとり筆者のみではあるまい。

だがわれわれは、わが国の民主主義の運命について、いたずらに悲観的であってはならない。世界最強のドイツ共産党と、もっとも古く輝かしい歴史を誇ったドイツ社会民主党が、ほとんどみるべき抵抗もなしにナチスの軍門に下った一九三三年当時、そして日本が無謀な侵略戦争を中国本土に試みた一九三七年頃の、あの「暗い谷間」の時期と比較するならば、現在の世界は、平和と民主主義を護ろうとする勢力が、かつてとは比較にならぬほど増大しているからである。とりわけアジア・アフリカ諸国の覚醒と民族的な独立とは、世界の安定勢力として戦争を抑制し、世界の世論を平和の方向に導くのに偉大な貢献をなしつつある。

一九三〇年代、ファシズムと軍国主義が世界を恫喝しつつあった時代には、一発の銃声はたちまちにして全面的な戦乱に発展し、被圧迫民族の国土は蹂躙され略奪され、民衆は凌辱の憂き目にあわされるのが常であった。しかしながら、第二次大戦後の世界は一変した。いまやもっとも侵略的な大国ですら、武力をもってしては到底これらの諸国を制覇することはできない。武力的な侵略政策が、平和を護ろうとする勢力の前にいかに無力であるかは、スエズ問題におけるイギリスおよびフランス、また最近のイラク革命においてアメリカがとった威嚇的な態度が、如実にこれを証明している。

しかし、世界の大勢が、戦争に反対する勢力にとって有利に展開しつつあるとしても、われわれは拱手傍観を許されない。なぜならわが国の政治は、世界の大勢に逆行してこの一、二年来きわめて危険な方向に進んでいることを感ずるからである。このままで推移す

れば、やがて憲法は改悪され、戦争と破滅の途をえらぶことは充分考えられる。第二次世界大戦の結果、生れかわったはずのわれわれの祖国は、わずか十数年たった今日、再び大きな危機に直面している。このときにあたり、われわれは一体何をなすべきであろうか。われわれインテリゲンチャによってもっとも重要なことは、ともすれば無気力におちいりがちな態度をすてて、勇気をふるいおこし、言論はもちろん、その他のあらゆる行動をもって、民主主義を擁護するための運動を積極的に支持することである。もちろん、その立場により、あるいはイデオロギーにより、その活動のしかたに若干の相違はあろうとも、いやしくも良心的に行動し、深く日本を愛する者は、われわれの祖国がいま容易ならぬ段階にさしかかっていることを認識するであろうし、このような認識の上に立って、何らかの形で政府の反動的な政策に抗議することは、知識人に課せられた最低の義務であるといわなければならない。

アメリカ合衆国のように、むしろ旗をおしたてて、独立をかちとるという輝かしい民族独立の歴史をもたず、またフランスのようにブルジョア階級を中心とする広汎な大衆のはげしくも血なまぐさい闘争を経験したことのなかったという歴史的な事実が、日本におけるブルジョア民主主義の勢力を弱め、ファシズムの前に膝を屈せしめた最大の原因であった。そしてこれこそ、ひとたび政治が反動化すれば、いわゆる自由主義者が権力に迎合し、その無節操と無気力とを暴露する所似である。

もちろん、こう言ったからといって、わが国にすぐれた自由主義者や民主主義者がまったくいなかったというわけではない。塾祖福沢諭吉をはじめ中江兆民、植木枝盛、田岡嶺雲、内村鑑三、田中正造など封建遺制と闘い、人民の権利を擁護して屈しなかった人々も少なくない。一部の人々をのぞけばこれらの人々の業績が正しく評価されなかったのは、日本の思想史の研究において彼等がブルジョア・デモクラットであったという理由によっていた。しかしいまこうして民主主義の危機が叫ばれているとき、これらの人々が果した役割を正しく評価することは、決して無駄ではないし、むしろきわめて重要であるといわなければならない。この意味で、田中惣五郎教授の「吉野作造―日本的デモクラシーの使徒―」は、このような現下のさしせまった要求に、積極的に答えようとする力作である。

＊　＊　＊

吉野作造といえば、われわれの世代にぞくする多くの者は、大正期に活躍した民主主義者、いわゆる民本主義をとなえた政治学者であることと、あの明治文化全集二十四巻の編集者であることぐらいしか知らないというのが普通であろう。ところがいまこの伝記を読むと、ブルジョア民主主義者としての吉野が、大正から昭和にかけての時期に、いかに偉大な足跡を残したかを理解することができる。本書の内容は、つぎのようである。

一章　優等生、二章　東京帝大学生時代、三章　中国行そして洋行、四章　大正の政変と第一次世界大戦、五章　実践的論戦の展開、六章　普選時代、七章　ファシズム・コミュニズム・フューダリズムとのたたかい、八章　吉野の抵抗とその死。

の八つの章からなり、四百頁をこえる大著である。

本書のもっとも目だった特徴としては、実に豊富な資料を駆使して、微に入り細にわたる詳細な研究であることであろう。とくにあらたに発見された吉野メモをはじめ、吉野博士に関係あるあらゆる文献と肉親や親戚および友人であった方々の追憶までを随所に活用されている点は、すでに資料研究について令名ある著者にとっては当然のこととしても、その努力のほどに深く敬意を表するものである。それから、本書は、たんに吉野作造博士個人の伝記であるばかりでなく、明治から大正をへて昭和にいたる政治史でもあり、近代日本の政治のうつりかわりのなかに、人間吉野の成長の過程を浮きぼりにしていることである。この点、明治から大正にかけての日本の政治史についての著者のなみなみならぬ造詣のほどをうかがい知ることができると同時に、読む者をして、日本の近代史および社会思想史への興味を刺戟せずにはおかぬであろう。

吉野作造は、一八七八年―明治十一年一月二十九日、宮城県志田郡古川町に、小さな呉服商の子として生れた。彼の生家の暮しは必ずしも楽ではなかったにせよ、働き者の母の内助の功により養蚕を副業としていた勤勉な父、年蔵は、明治三〇年代には羽二重会社を創立し、また古川町の町長に推されたといわれるほどの名士となっていた。こうしたいわば資本主義黎明期にしばしば見られるような正直にして勤勉な家庭に育ったこと、そしてさらに東北人らしいねばり強さとが、やがて吉野の人間形成に大いにあずかったことが考えられる。頭脳明晰にして秀才であった彼は、仙台一中から第二高等学校をへて東京帝大を優秀な成績で卒業したが、この間に彼の一身上におこった変化は結婚とキリスト教徒になったことであった。

キリスト教に入ったことは、彼を権力に屈しない民主主義者たらしめたという意味で、彼の生涯に決定的な影響をあたえたようである。吉野が明治三三年、海老名弾正の本郷教会に参加したころは、日本の資本主義はその確立期にあたり、治安警察法も施行され労働問題も識者の注目をひき、また幸徳秋水等も社会主義思想を宣伝しはじめていた。彼もこうしたなかに社会主義に関心をいだき、本郷教会を通じて、同じくクリスチャンであり社会主義者でもあった安部磯雄、木下尚江と相識った。彼は社会主義にかなりの同情を示したけれども、幸徳等の無政府主義には、キリスト者としての立場から反対したといわれる。明治三七年七月、東京帝大を卒業して、政治史研究のため大学院に入ったが、このころから明治四二年三二才で東京帝大の助教授に任ぜられるまでは、彼にとっては経済的にはもっともつらい時代であったろう。二九歳の時、中国軍閥の巨頭、袁世凱の長子の家庭教師として大陸にわたり、つぶさに辛惨をなめたが、この中国での見聞が、やがて彼に広い視野をあたえ、民本主義者として完成せしめる上で重要な意味をもっていた。

大正二年ヨーロッパの旅を終えて、翌三年法科大学教授に任ぜら

れた時、第一次世界大戦が勃発したが、この時期から彼の対外的な言論活動はにわかに活潑となった。すなわち大正五年、「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの道を論ず」という有名な論文を発表し、それより中央公論によっていわゆる民本主義をとなえ、大正七年にはロシヤ革命やシベリア出兵について独特の論理を展開し、封建主義および軍国主義に真向から反対した。当時はドイツの敗戦の結果として、日本にもデモクラシーの思想が滔々として流入する一方、ロシア革命の影響や戦後の物価の昂騰により、米騒動がおこり、物情騒然たる有様であった。このようなデモクラシーの思潮のもり上るなかに、吉野は右翼団体、浪人会の立会演説会において圧倒的な勝利をおさめた。想えば、この第一次大戦後から大正十二年関東大震災までの時期は、日本のデモクラシーにとって黄金時代であった。そしてまさにこの時代に彼は、その民本主義をひっさげて、日本のデモクラシー運動の先頭に立ったのである。

吉野によれば、「西洋のデモクラシーの普通の用語として二つの内容がある。一つは主権の所在にかんするもの、二つは運動の方法に関するものとする。このうち民主主義の運用に関するものについて、これを民本主義と呼ぶ」という。当時の絶対主義的天皇政府との摩擦をさけ、天皇主権の旧明治憲法の枠内において民主主義を実現しようとする苦肉の策であり、ここに彼が著者によって「日本的デモクラシーの使徒」と呼ばれる理由があるのではないだろうか。

関東大震災、普選時代は、甘粕大尉による大杉栄虐殺事件と共産

党の成立に象徴されるような社会主義運動の昂揚をもって特徴づけられる。せまりくるファシズム的軍国主義は、治安維持法を制定して、一切の社会主義運動を圧殺しようとして、民主主義にたいする攻撃を開始した。吉野は、共産主義運動には反対しつつも、たとえば森戸事件においては特別弁護人として、思想の自由を擁護することをおそれなかったのである。

彼はその後大正十三年、東京帝国大学教授を辞任し、朝日新聞に入社したが、はからずもその年の二月関西で行われた時局講演会において、清浦内閣を批判したものを出版したため筆禍にあい、朝日を退いて東大法学部講師となった。それ以後昭和八年、肺結核で湘南の地に歿するまでの彼の晩年は、ファシズムと封建主義そして共産主義との闘いであり、ブルジョア民主主義者としての苦悶の姿とも見えたであろう。ブルジョア・デモクラットであった彼には、ファシズムと共産主義との本質的な相違を区別できなかったのではないか。

大正の終りから昭和のはじめにかけて昂まる北一輝らのファシスト運動とコミンテルンの指導のもとに活動を開始した日本共産党のイデオロギーの間にあって、吉野は、日本におけるデモクラシーの運命について、真険に考えたのであった。とりわけ、国体の変革はいかなる方法をもってしてもこれを許すべからずとした彼も朝憲紊乱とかあるいは治安妨害を理由にして、学問研究の自由が奪われ——たとえば森戸事件や京都大学および同志社大学における社会科学研究会の学生検挙事件などの場合——官憲の横暴が目にあまるものとなったとき、彼は治安維持法そのものに、批判の刃を加えることをおそれなかった。また共産主義インターナショナルの学生にたいする影響を憂慮し、そのデモクラシーとの矛盾について学生に警告したのであった。著者も明らかに指摘されているように、彼の民本主義は、階級への認識が稀薄であるため、ファシズム的独裁と共産主義的独裁とを同一視し、体制としてのこれらの独裁政治にたいしてはきびしい批判の態度をもってのぞみながら、指導者であるムッソリーニとレーニンにたいして礼讃もしくはその役割を重視していることなどは日本的デモクラットとしての彼の矛盾を露呈している。これについて著者は、「要するに、民本主義者吉野は、ブルジョア地主の進展をはばむ藩閥、軍閥、官僚閥とたたかうことによって、日本的民主主義の一角を昂揚しようとつとめている間に、敵のためにはばまれ、明治文化研究というさらに底深い研究によって、第二の進出を計劃している間に、すでにそのブルジョア地主の背後から成長してきたプロレタリア・農民が進出してき、その前後の敵にはさまれたのが、昭和初頭の吉野の立場であったといえる」と結論づけておられる。

以上は、本書のまったく表面的な紹介にすぎず、筆者は、著者の意図されるところを把握できなかったのではないかとおそれるものである。ただ筆者の感じたところを卒直にのべさせていただくならば、㈠豊富な資料を通じて実証的に叙述された努力は、敬服に値するとしても、いささか事実の羅列的傾向を感ずること。㈡吉野作造を、一種の理想的人間像にしているような印象をうけること。というのは吉野の人間的な弱点についてはほとんどふれられていないし、ブルジョア民主主義者としての吉野にたいして、たとえば左翼の人々がどのような評価を下したか、このような点について著者はふれておられない。

もちろんこれは、筆者の読後感であり、著者にたいしては的はずれの批判であるかもしれない。すぐれて精力的な研究にたいし、心から敬意を表するとともに、非礼にわたる点については謹しんで著者の御意恕をこうものである。（昭和三三年七月、未来社刊、五八〇円）

〈追記〉この書評を執筆するに際し、七月二六日附の朝日新聞の書評、および七月二八日附の読書新聞掲載の石田雄氏の書評を参照することができた。

（飯田　鼎）

W. Kalweit 著
『現代資本主義における物価騰貴の諸原因について』
(Werner Kalweit: Über die Ursachen der Preissteigerungen im modernen Kapitalismus, 1958, Berlin, S. 140.)

著者 W. Kalweit は東ドイツの経済学者である。本書はマルク